

「あづま路の道のはて」より

進学情報センター [a1] 永井 久美子

今号で76号を数える本ニュースの創刊は、1992年に遡ります。進学情報センターへの着任により、自身が学生の頃にも配布されていたこの媒体に寄稿する機会を得たことをとても光栄に思いつつ、以下、自己紹介を兼ねて、学生生活と進学選択にまつわる自身の体験談などを記します。

以下、ごく個人的な見地からの文章とはなりますが、ここ数年、女子学生の比率の増加が促進され、特に遠方出身の女子に対する支援が話題となっている中、地方出身者である筆者の体験談が、お読みくださる方々にとって少しでも参考になりましたなら幸いです。

拙文のタイトルの文言に聞き覚えのある方も多いことと思います。筆者の出身地は茨城県です。常陸国を「あづま路の道のはて」と呼ぶ表現は、『更級日記』の冒頭にあることで広く知られています¹。遡ると、『古今和歌六帖』第五帖服飾部に、帯を題とする歌の一首として「あづま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな²」という紀友則の詠があり、『更級日記』の書き出しは、この歌をふまえた、引歌表現と呼ばれるものです。

茨城からは、自宅通学をされている方も多くいらっしゃると思います。ただ、私の実家は、県内でも毎日東京に通うには遠い距離にあるということで、大学入学を機に、一人暮らしを始めることとなりました。上京自体にはまったく反対されませんが、女子学生会館住まいを薦めた両親は、やはりいろいろと娘の心配をしていたのだと思います。こうして上京後は、学生会館のお世話になりました。

「地方」とはいえ都市部の出身だったため、自分の地元を「田舎」だと思ったことは、上京するまで、実はそれほどありませんでした。ただ、地元で「東大」の名が持つ重みが、東京でのそれ以上であるということは、帰省すると実感するところがありました。さらに「女子」という要素が加わることで、良くも悪くも「敬遠」された経験が、東京でも地元でもまったく無かったわけではありません。

ただ、割と楽天的な性格のためか、地方ではまだ少数であった「東大女子学生」であることに、過剰に気負うところはありませんでした。東京でも地元でも、それほど深く悩まずに済んだのは、周囲に好意的に接してくれる人が多かったおかげでもありません。ただ、自分は周りが思ってくれるほど大層な人間だろうか、と考えたことはあります。

母集団の大きさや種類はともかく、何らかの形で、高校までに成績でトップに立った経験がある東大生は少なくないでしょう。絶えず頂点を走り続ける人も、もちろんいることと思います。ですが、大学、あるいは中学・高校に入ったときに、自分と「同程度」の人間は大勢いると感じ、才能に恵まれた人を目の当たりにする衝撃があった人は多いのではないのでしょうか。

筆者の場合は、人生初の受験を経ての高校入学時に、自分の個性について深く考える機会がありました。いわゆる進学校に入ると、「頭がいい」ということはただそれだけで個性とはならず、そこに所属するうえでの一つの前提となります。その中で自分を保つためには、苦しくてもさらに上を目指すか、「埋没」することを許容するかという、精神的な選択を迫られます。単純な二択ではないでしょうが、同様の経験をした人は多いと推察します。私は前者であろうとして、随分もがきました。

むろん、学業成績だけが人間評価のものさしではないはずですが、ただ、「頭がいい」ということを自分のアイデンティティの中心に据えてきた学生が、やはり駒場には多いようです。そして、その主軸が揺らぐ洗礼を駒場で初めて受ける学生も、毎年多いようです。このことは、自身の学生時代にも感じましたが、進学情報センターの教員として学生の皆さんの相談を受ける立場に立つと、珍しくないパターンなのだと、改めて実感します。

優秀な人と接することが切磋琢磨につながればよいのですが、中には強いコンプレックスを抱いてしまう学生もいます。比較対象が極端であるがゆえの悩みであり、そこまで劣等感にさいなまれる必要はないはずなのですが、やはり本人にとっては大問題です。ただ、過度に自分を卑下したり、極端に思い詰めたりはしないでほしいと切に願っている教員がいることを覚えていてもらえればと思います。そして、コンプレックスを抱く必要なくトップに立てて

いる人には、学業成績だけで人を見下したりすることなく、周囲に敬意を表することのできる人になってほしいと切に願っています。

成績の上下を問わず、進学選択にあたっては自分の特性がどの分野で活かせるのかに悩む人も多いでしょう。進学を希望している分野と自分の得意分野とにずれがある人や、そもそも自分が何をしたいのかが分からず、五里霧中となってしまう人もいます。それぞれ苦しいことと思いますが、進学選択を機に、自分を本当に活かせる道を見つけられることを、進学情報センターの教員としても、一個人としても、心から応援しています。

個性という言葉、この文章の中で私もこれまでに用いてきました。自分の個性を大切に、とは、進学選択の機会以外でも、一般によく言われることだと思います。学問や芸術の分野でも、先行例とは異なる研究や作品を生み出すことが推奨される傾向があります。

ただ、自分が研究対象としている絵巻物と向き合っているのは、先行する作品の内容を継承することで生み出された作品の多さです。先に引用した引歌表現はその例の一つであり、絵の場合は、たとえば群衆表現などにおいて、別の絵巻に登場する人物が、他の作品で組み合わせを変えて引用されることがあります。

むろん、これらは古典における引用のあり方であり、今日、剽窃や盗作は厳禁です。私自身も、論文を書くとき、引用には註を付しています。ただ、先行研究を参照することなく独自の論を展開することは、今日でも望ましい姿勢ではありません。研究でも、伝統を尊重したうえでこそ自分の「個性」が発揮されます。研究者以外の道を目指す人にとっても、選択した学部・学科の学問の伝統が、皆さんの「個性」を際立たせ、伸ばすものであるならば、進学選択の結果に納得し満足して学ぶことができることと思います。

もし第一希望の学部・学科に進学することがかなわなかったとしても、どうか過剰な落胆はしないでください。進学先で、自分が知らなかった才能に気付くことがあるかもしれませんし、希望の就職先へは、きっと複数のルートがあることと思います。

現在は進学情報センターで進路に迷う学生の皆さんの相談にあたっていますが、自分自身、進学先の

決定までには相当悩みました。何でも経験になる、という表現は常套句かもしれませんが、さすが、進路の決断にあたり複数の選択肢を真剣に検討したことは、思いがけず、現在の仕事の内容に直結する経験となりました。人生、何が未来に繋がるかは、本当に分からないものです。

私が進学したのは、教養学部教養学科第一・比較日本文化論分科でした³。そこに至るまでには、さまざまな学科の資料を集め、複数のガイダンスに出席したほか、他ならぬ進学情報センターも訪ねました。

絵巻物を研究したいという動機の起源は、今思えば、古文と歴史と美術が好きだった高校時代に遡ります。ですが、絵巻物を研究したいと具体的に決断できたのは、大学の前期課程での授業を受け始めた後のことでした。総合科目の履修選択や、現在の初年次ゼミナールの前身である基礎演習での発表のテーマ設定など、そのたびごとに苦心しましたが、日々の選択の結果が、今に繋がっているように思います。進路がまったく決まっていなかったと思われる皆さんも、知らず知らずのうちに、きっと一歩ずつ前に進んでいるのではないのでしょうか。

私が学生だった頃に「進学振り分け」と呼ばれていた制度は「進学選択」への名称の変更を含め、ここ数年で大きく変わってきました。同じ中学・高校やサークル・部活の先輩に話を聞ける人もいますが、くれぐれも、前年度までとは方式が異なることを忘れずにいてください。

そして、相談できる人が周囲になかなかいない、あるいは友人・知人には相談しにくい、といったときには、進学情報センターで相談を受け付けてしますので、足を運んでみてください。最新の正確な情報の提供と、皆さんの悩み事の解決に、少しでも役に立てたらと思っています。

1 藤岡忠美、中野幸一、犬養廉校注・訳『新編日本古典文学全集 26 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（小学館、2003年）、279頁。

2 『古今和歌六帖』歌番号 3360、「新編国歌大観」編集委員会編『新編国歌大観 第2巻1 私撰集編 歌集』（角川書店、1984年）より引用。仮名書きの語を漢字に改めた際には、仮名をルビで表記した。

3 後期課程の改組により、この名称の分科こそ今はありませんが、現在は、教養学科超域文化科学分科に、比較文学比較芸術コース、学際日本文化論コース、現代思想コースが設置されています。